

---

# 闇属性の中学生（二百文字小説）

りったん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇属性の中学生（二百文字小説）

### 【Nコード】

N8471X

### 【作者名】

りったん

### 【あらすじ】

妙義榛名は陰陽師の家系。今日も奇行が目立ちます。

大好き！（前書き）

聖騎士先生のお題に基づいて書いてみました。10話程度で完結すると思います。

大好き！

妙義<sup>みょうぎ</sup>榛名<sup>はるな</sup>、中学二年。

彼女の家は代々続く陰陽師の家系。

この世に蔓延<sup>はびこ</sup>る邪悪な存在を浄化するのを生業としている。

榛名はクラスで浮いた存在。

身なりはごく普通だが、クラスメートは榛名を避けていた。榛名の特異な性癖が原因で。

「滅殺！」

榛名が叫んだ。休み時間である。皆ギクツとする。

「また始まったか」

クラス委員が呟く。

「大好き、クロト様あ！」

榛名は某アニメキャラに嵌る腐女子である。

お前、キモいんだよ！

妙義<sup>みょうぎ はるな</sup>榛名、中学二年。

彼女は陰陽師の家系。

そのためではないのだが、榛名はクラスで浮いた存在。

男子達は奇異な行動をする榛名を、

「お前キモいんだよ」

と言つて虐める。

女子達も榛名を嫌っているので誰も助けてくれない。

だが、当の榛名は何も感じていない。

ある日、クラスメートの女子がトイレで誰かに足を掴まれたと言った。

それを聞いた榛名は、

「オンアビラウンケンソワカ」

と人知れず魔を消していた。

## 榛名の気持ち

妙義榛名、みょうぎ はるな 中学二年。

彼女は陰陽師の家系。

そのためではないのだが、榛名はクラスで浮いた存在。

榛名はその力で学校に吹き溜まっている邪気を抜っていた。

でもそんな事を知らない男子は榛名を虐め、女子は無視していた。

それでも榛名は気にした様子もなかった。

いつものように一人で下校していると、

「ちょっといいか？」

クラス委員の渋谷健太が声をかけて来た。

榛名はドキッとした。

実は健太が好きなのだ。

お前が好きだ

妙義<sup>みょうぎ はるな</sup>榛名、中学二年。

彼女は陰陽師の家系。

榛名はクラスで浮いた存在。

榛名はその力で学校に吹き溜まっている邪気を抜っていた。

でもそんな事を知らない男子は榛名を虐め、女子は無視していた。

それでも榛名は気にした様子もなかった。

ある日の下校時、榛名はクラス委員の洪川健太に呼び止められた。

「何？」

榛名は自分の気持ちを抑え、素っ気なく尋ねた。

「お前が好きだ。付き合って欲しい」

健太は言った。

幸せなのかな？

妙義<sup>みょうぎ</sup>榛名<sup>はるな</sup>は中学二年。

彼女は陰陽師の家系。

そしてクラスで浮いた存在。

榛名はその力で学校に吹き溜まっている邪気を抜っていた。

そんな榛名にクラス委員の渋川健太が告白した。

翌日その衝撃はたちまち学校中に伝わった。

「何よ、あんな変な女と付き合うなんて」

健太ファンの女子達は健太を恨まず榛名を恨んだ。

「気にするな」

健太は榛名を気遣ってくれた。

「うん」

榛名は思った。

これって幸せなのかな、と。

お前は俺の彼女だよ

妙義<sup>みょうぎ はるな</sup>榛名は中学二年。

彼女は陰陽師の家系。

そしてクラスで浮いた存在。

そんな榛名がクラス委員の渋川健太と付き合い始めた。

最初は傍観していた女子達だったが健太が榛名の手を取って帰ったり登校する時も彼女を家の前まで迎えに行ったりしたので気が気ではない。

「変な術を使って渋川君を操っているのよ」

そんな噂が飛び交うようになった。

「心配ない。お前は俺の彼女だよ」

健太は優しく榛名を抱きしめた。

俺の事、好きなのか？

妙義みょうぎ はるな榛名は中学二年。

彼女は陰陽師の家系。

そしてクラスで浮いた存在。

榛名はクラス委員の渋川健太と付き合い始めた。

それが切っ掛けで榛名の奇行は少しずつ減って行った。

健太は榛名と登下校し、ハンバーガーを食べたりした。

榛名はそれが楽しい事なのかどうかわからなかった。

ある日、健太が榛名にキスした。

榛名は驚いて健太を突き飛ばしてしまった。

「お前、俺の事、好きなのか？」

健太は榛名に尋ねた。

わからない気持ち

妙義<sup>みょうぎ</sup>榛名<sup>はるな</sup>は中学二年。

彼女は陰陽師の家系。

そしてクラスで浮いた存在。

榛名はクラス委員の渋川健太と付き合い始めた。

榛名は健太に、

「俺の事、好きなのか？」

と尋ねられた。

「好きだと思う」

榛名は健太に初めて会った時から心を惹かれていた。

「ならキスもいいし、こんな事もOKだよな？」

健太は榛名の胸を触った。

「え？」

榛名は驚いて健太を見た。

「好きなんだろ、俺の事？」

健太はニヤリとして訊いた。

わかったような気がする

妙義<sup>みょうぎ はるな</sup>榛名は中学二年。

彼女は陰陽師の家系。

そしてクラスで浮いた存在。

榛名はクラス委員の渋川健太と付き合い始めた。

健太に胸を触られた榛名は、ようやく自分がどうして健太に惹かれたのかわかった。

「わかったような気がする。貴方に惹かれた理由」

胸を触り続ける健太の右手に自分の右手を重ねて榛名は言った。

「どういう事？」

健太はニヤリとして尋ねる。榛名は、

「貴方が闇だから」

と言つと九字を切る。

さようなら

榛名は健太の正体を知った。

健太は闇の者だった。

「俺は闇そのものさ。お前と同じだ」

健太の言葉に榛名は一瞬狼狽えたが、

「でも今は私は人間。貴方とは違う!」

榛名の呪文が健太を切り裂いた。

「お前も同じだ、榛名!」

健太はそう叫び、消滅した。

「私も闇……」

そして彼女の一家はそのまま町を去った。

次の日、健太がいなくなった事で学校は大騒ぎとなった。

だが、榛名がいなくなった事は誰も気づかない。

それが榛名の最後の術。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8471x/>

---

闇属性の中学生（二百文字小説）

2011年11月13日17時30分発行